

「舞姫」が國民之友新附録中に就て第一の傑作たるは世人の許す所なり之が、褒評をなしたるもの少くせす然れども未だ其意趣を察したるものは之れ無きが如し予は二三番の扉を繰りて著者其人に質問せんを欲す、

「舞姫」の意匠は戀愛と功名と獨立せざる人生の境遇にして此境遇に處せしむるに小心なる臆病なる懸念心ある——勇氣なく獨立心に死しき一箇の人物を以てして、以て此の地位と境遇との關係を發揮したるものなり故に「舞姫」を批評せんと欲せば先づ其人人物（太田豊太郎）と境遇との關係を精査するを必要とす、抑も太田なるものは戀愛と功名と獨立せざる場合に際して斷然戀愛を捨て功名を採るの勇氣あるものなるや曰く否な、彼は小心の懸病的の人物なり彼の性質は寧ろ隱微の傾向あり理に於て彼は戀愛の情に切なる者あり「處女たる事」(Gambell's study) を重すべきものなり夫れ此「ユングフロイリヒカイト」は人間界を備ふるものにあらずれば之を輕侮し之を棄却せざるなり(例之はナホランゴイゼフロンを棄つるが如し)否な之を輕侮し之を棄却する程の精神的苛烈は膽大にして且つ冷淡の個人物に非ざれば之を作すこと能はざる爲なり、今本篇の主人公太田なるものは可憐の舞姫と戀愛の情緒を斷てり、無事の舞姫に愛慕可憐を加へたり、彼を玩弄し彼を狂亂せしめ終に彼を以て精神的に殺したり而して今其人物の性質を見るに小心翼翼たる者なり、慈悲に深く戀愛の情に切なる者なり「ユングフロイリヒカイト」の尊重すべきを知る者なり、果して然らば「良心の行爲は性質の反映なり」と云へる隨言を慮まざるにあらざる以上は太田の行爲

——即ちエリスを棄てて歸東するの一事は人物と境遇と行爲との關係を離破するものと謂はざる可からざるを要するに著者は太田をして戀愛を捨てて功名を求めしめたり、然れども予は彼が處女に功名を捨てて戀愛を取らざるべきものたることを確信す、ゲネター少壯なるに當つて二の戀愛劇を作るや、迷夢弱病の感情を元と劇劇體物の行爲を描き其主人公は概然薄志弱行なり故にメルクを彼を騙して曰く此の如き如き何人とも心なき汚穢なる愚物は將來決つて寫す勿れ此の如きことは何人とも爲し能ふなり予はメルクの評言を以て全く至當なりとせば言はず又「舞姫」の主人公を以て愚物なりと謂わす然れども其主人公が薄志弱行にして精氣なく誠心なく隨つて感情の健全ならざるは予が本篇の爲めに惜む所なり何なか感情を云ふ曰く性情の動作にして意思——若察せあるを知つて之を實行するに當つては終に區別あるを忘れたる者なり。著者は主人公の人物を説明するに於て頗る前後矛盾の筆を用たり請ふその所以を察す

我心はかの合歡といふ木の葉に似て物ふられば離れて離れて我心の離れぬを我は處女に似たり余が幼き時より著者の教を守りて愛の道なだりしは、この道を歩みしも皆を勇氣ありて能くしたるに非ず(云々(四頁下段))

是れ著者が明かに太田の人物を明言したるものなり然るに著者は後に至りて之と反對の言をなしたり

命は我月一つの運命につきても又我月に依らぬ他人の事につきても果斷あり自らも降りしが云々(四頁上段)

命は守る所を失はんと欲して己れに敵するものには抵抗せざりども友に對して云々(二頁上段)

此果斷と云ひ抵抗と云ひて前提の「物ふるれば離れて離れて我心は離れぬなり云々」の文字を相撞して并行する能はざる者なり是れ著者の粗忽に非ずして何ぞや、

7

都市が生む欲望

田山花袋「少女病」

職場にも家庭にも居場所のない男が見出した安息の場とは——。赤裸々なヒューマンドキュメントが歓迎された明治末。膨張する東京が生んだ新しい病理に、自然主義作家・田山花袋が肉薄する。

山手線の朝の七時二十分の上り汽車が、代々木の電車停留場の崖下を地響かせて通る頃、千駄谷の田畝をてくくと歩いて行く男がある。此男の通らぬことはいかな日にもないので、雨の日には泥濘の深い田畝道に古い長靴を引ずつて行くし、風の吹く朝には帽子を阿弥陀に被つて塵埃を避けるやうにして通るし、沿道の家々の人は、遠くから其姿を見知つて、もうあの人が通つたから、あなたお役所が遅くなりま

すなどと春眠いぎたなき主人を揺り起す軍人の細君もある位だ。此男の姿の此田畝道にあらはれ出したのは、今から二月ほど前、近郊の地が開けて、新しい家作が彼方の森の角、此方の丘の上に出上つて、某少将の邸宅、某会社重役の邸宅などの大きな構が、武蔵野の名残の櫟の大並木の彼方に、貸家建の家屋が五六軒並んであるといふから、何でも其処等に移転して来た人だらうとの専らの評判であった。何も人間が通るのに、評判を立てる程のこともないのだが、淋しい